2022 年 1 月 28 日

日本ジオパーク新規認定審査および日本ジオパーク再認定審査結果

日本ジオパーク委員会

日本ジオパーク委員会は、昨年 10 月から 12 月に現地調査を行った 2 地域の日本ジオパーク認定と 11 地域の日本ジオパーク再認定の可否について審議し、以下のとおり決定した。

日本ジオパーク認定：十勝岳ジオパーク、五島列島（下五島エリア）ジオパーク
日本ジオパーク再認定：磐梯山ジオパーク、下仁田ジオパーク、ジオパーク秩父、男鹿半島･大潟ジオパーク、四国西予ジオパーク、おおいた姫島ジオパーク、おおいた豊後大野ジオパーク、三笠ジオパーク、とかち鹿追ジオパーク、三島村・鬼界カルデラジオパーク、島根半島・宍道湖中海ジオパーク

現在、日本ジオパークは 46 地域である（うちユネスコ世界ジオパークは 9 地域）。

日本ジオパーク新規認定

十勝岳ジオパーク

約 100 万年以上前の巨大噴火による火砕流堆積物でできた丘陵、活火山である十勝岳の噴火活動などを特徴とし、大正時代の火山性泥流による火山災害の経験と、そこから現在の農業地帯へ復興・発展してきた歴史を有する。

認定ジオガイドや「十勝岳ジオくらぶ」のメンバーをはじめとする住民、観光協会、教育機関等、様々な関係者にジオパークの意義と活動が浸透しつつあり、地域全体を一体的に運営する体制が構築されている。活発な防災教育や土づくりの苦労など農業に関する地域学習、オーバーツーリズムを克服する持続可能な観光への取り組み、アイヌ語地名を生かしたツアーなど、多様な活動が始まっており、さらなる発展が期待できる。

以上のことから、日本ジオパークとして認定する。

五島列島（下五島エリア）ジオパーク

大陸由来の厚い堆積物、五島列島をかたちづくった断層やマグマ活動の痕跡などの多様な地形地質遺産を有する。また、九州の西端という位置関係から、大陸との交流に関わる文化遺産や人々の暮らしと自然遺産との密接な関係を見ることができる。

事務局体制の強化、SNS などを活用した可視性の向上、ジオガイドの養成、学校におけるジオパーク学習の充実などを進め、地域住民にもジオパークの理念や目的の共有が

図られた。その結果、地域団体や事業者、子どもたちが積極的にジオパーク活動に参加するようになり、今後の展開が期待される。

以上のことから、日本ジオパークとして認定する。

日本ジオパーク再認定

磐梯山ジオパーク

2019 年条件付き再認定以後、構成自治体間で対話が重ねられ、緊急に解決すべき課題への対応が図られた。具体的には、基本計画と保全計画が策定され、若手が中心となって活躍できる運営体制となった。サイトのデータベース整備が進み、ガイドを含む多様な主体による参加型モニタリングが行われている。環境省や福島県をはじめ大学や地域のまちづくり団体、自然保護団体、若手農業者との連携が奏功してエリア内の活動に広がりが見られ、地域の暮らしを含めたジオパークのコンテンツが充実してきた。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

下仁田ジオパーク

この４年間で、大地の成り立ちを３つのテーマに整理するなど指摘事項に対する改善が見られた。地域住民の主体的な活動も活発に行われ、観光協会との協力体制が進み、教育活動についてもジオパークとして組織的に推進可能となった。今後はさらに、地形地質遺産の地球科学的な価値をわかりやすく伝えるとともに保全方針を策定し、文化や生態系を意識した活動やツーリズムに関しても充実させていくことを期待したい。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

ジオパーク秩父

2019 年の条件付き再認定後の取り組みの中で、指摘事項それぞれへの対応に進展が見られた。特に、分かりやすい公式ガイドブックの出版や協力的な民間事業者の新規参画によって活動が質的に向上するきっかけが生まれている。また、鉄道会社などとの連携により地域内外で可視性を高めている。今後はさらに、お祭りなど秩父地域独自の文化や無形遺産、産業などの身近な素材とジオとのつながりを楽しめるジオパークとして展開することを期待したい。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

男鹿半島・大潟ジオパーク

2019 年条件付き再認定時の課題であった運営体制が強化されるとともに、地形・地質遺産のデータベース化が進んでいる。拠点施設を生かした幅広い分野の教育プログラム・教材が開発されており、多くの教育旅行を受け入れている。また、水族館や展望台などの観光拠点と連携した取り組みが進んでおり、「ジオパーク応援商品」も軌道に乗

りつつある。今後は、より多くの地域住民がこの魅力あるジオパーク活動に参画できる仕組みづくりに期待したい。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

四国西予ジオパーク

この 4 年間で、前回の審査における数多くの指摘事項に対する十分な対応が行われた。特に 2018 年 7 月の豪雨災害を機に、防災教育プログラムが開発・提供され、地域住民の自然災害に関する理解が進んだ。活動の質を維持・発展させるよう工夫された運営体制の下で、地域住民や団体、学術関係者が連携し、ジオパーク活動を通じた地域づくりが展開されている。エリア全体のサイトの設定や、ツーリズムに関する情報発信などの課題についても、4 月に開館予定の「四国西予ジオパークミュージアム」を活用することによって、解決が見込める。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

おおいた姫島ジオパーク

この 4 年間で、前回審査の指摘事項全てが解決済もしくは対応が進展中である。また、国の重要文化的景観の申請準備段階において、ボトムアップでジオストーリーの整理やパンフレットの改訂、サイトの保全・保護等の対応が行われたことは大きな成果である。今後、ジオパークの管理運営計画の策定を行い、SNS を活用した情報発信、インバウンドを含む観光客の視点で行う案内看板の改訂、ガイド育成など、継続的な取り組みを期待したい。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

おおいた豊後大野ジオパーク

この 4 年間で、指摘事項への改善が進み、拠点施設となる資料館が完成した。域内の学校におけるジオ学習やガイドの会の活動が活発に行われ、道の駅など協定を結ぶフレンドショップとの連携が進むなど、ジオパーク活動が地域に根づきつつある。今後は、事務局が主体的に、地域住民の意見を聞きながら、可視性の向上ならびにユネスコエコパークなどとの連携が進むことを期待したい。

以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

三笠ジオパーク

この 4 年間で、前回指摘事項への改善に取り組んできた。2020 年度には過去最高の集客数となるなど教育旅行の受け入れ・誘致への尽力が着実に成果を出していることや、ジオパークのグッズ売り上げ収入を炭鉱遺産の学術調査にあてていることは評価に値する。事務局スタッフ数が十分に確保され、若手人材育成にも力を入れている。今後は、アンモナイト化石を多く含む蝦夷層群が持つ価値の理解と共有が、より深く地域住民に

浸透していくようジオパーク活動を進めていってほしい。
　以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

とかち鹿追ジオパーク

　この４年間で、前回の課題であった運営体制の強化に努め、ジオパーク推進課が設置され地域との連携が図られた。さらに、専門員が加わることによってジオツアーやジオパーク学習、調査研究活動がさらに発展する環境が整った。町が推進する「鹿追型ゼロカーボンシティ」と協調し、地域住民がボトムアップのジオパーク活動を推進するようになった。永久凍土が残る山間部でのジオパーク活動が平野部でも活発化した。今後、地形地質の成立ちとアイヌ語地名、開拓の歴史、農業、酪農、食文化などを関連させ、「凍（しば）れの大地」のジオストーリーを発展させることが期待される。
　以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

三島村・鬼界カルデラジオパーク

　2019 年の条件付き再認定以後、指摘された課題の解決に向けた取り組みが進んでいることが確認できた。特に、防災体制の構築、教育での取り組み、大学との連携、刊行物の発行、ジオパークに貢献する人材の島内への定着などに進展があった。今後は、ジオパークの全体計画の改善と運営体制の強化を行い、ジオパーク活動に積極的な島民と事務局がうまく連携した活動を期待したい。
　以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

島根半島・宍道湖中海ジオパーク

　この４年間で、拠点施設が整備され情報発信機能が向上した。大学、民間団体や公民館によるジオパーク活動が展開され、地域コミュニティとの協働が進んだ。2021 年には日本ジオパークネットワーク初のオンラインによる全国大会開催を通して、関係者のジオパークに対する理解が深まった。今後は、早急に基本計画および保全管理計画を見直し管理運営を強化することで、ジオパーク活動のさらなる質的向上を期待したい。
　以上のことから、日本ジオパークとして再認定する。

以上